コラム5

なぜ生きものと生息地を守るのか？（生物多様性）

私たちは、湧水と緑と農の恵み豊かな東久留米を誇らしく思っています。その環境に魅力を感じて転入してきたという声も聞きます。私たちは、それが当たり前、放っておいても存続するように思いがちです。しかしその恵みは、はるか縄文時代から地域で湧水と緑と生きものを守り育ててきたものなのです。

東久留米市の樹林地や農地から浸透した雨水を源として、崖線などから湧き出た地下水の安定した水温、地温、気温は人々の住みやすさにつながっています。それらをもたらしている景観も、私たちに身近な恵みの一つですが、その景観はそれぞれの場（大気、水、土、地形など）で、その特性に応じて生育・生息する生きものと、その生きもののかかわりでつくられている多様な生態系の姿です（生物多様性：用語集参照）。さらに、それらは酸素や土、食料や薬、木材など、ヒトの存続にも必要な恵みを提供してくれています。

自然環境と多様ないのちは、それぞれの生活の場において、食を通じて複雑につながっています。はるか古代、雑食性であるヒトは、火を使うことで地球規模の環境変動を切り抜けてきました。しかし、この半世紀の都市化によって消費者として肥大化した人は、安定した食料供給を確保するため、単一作物の農作物・家畜生産によってその生活を維持するようになりましたが、気候変動や災害などで築き上げてきた生活を失ってしまうかもしれません。そのときのために、生きものとその生育・生息地をできるだけ多様な形で残しておくことが必要です。自然の持続的な循環・再生を考えずに、自然からの恵みを消費するばかりとなっては荒廃をもたらしかねません。農産物をはじめ自然の恵みに対して私たちは謙虚に向き合う必要があるのではないでしょうか。

これまでには、市内では様々な市民活動が実施されてきました（コラム12　水と緑と生きものに関わる市民活動について　を参照）。このような活動は、生きものの生育・生息地の保全・回復につながっています。今後も活動の灯を絶やさずに、多様な生きもののすみかでもある地域に残された水と緑と土を保全し、身近な緑を増やしていきましょう。

落合川最上流の湧水

南沢緑地保全地域

ギンヤンマ

タチツボスミレ